交流分析では、あくまでもAが主導権を握っている。池見酉次郎氏は著書「続・心療内科」の中で、このような「西欧的自我」でなく、絶対に主体的で孤独な「本当の自分」と自分を支える大自然の中にともにあるあらゆる存在者との連帯感に立つ「東洋的自我」の確立こそ心身医学的ゴールであると述べている。これは霊性の開発でなければならない。霊性が開発された時始めて自我の融合・統一がなされ、感情も欲望も、更には知性までもそれぞれ本来のあるべき姿で発現する。これは、小乗で二乗の果が求められ、大乗それも法華経へ来て始めて開三顕一が説き明かされた状況に似ている。この時、心は四面体から球体へと変容し円満な姿を表す。この原理を信心・行法・行事等にあてはめて、世界に通用する行学不二の宗教つまり、知目行足の知が行の目となり、行が知の足となる、科学とも矛盾しない宗教を期したいと思う。

台湾仏教における今昔

岡田栄照

明治二八年、台湾は日本の領有に帰するが各地で武装抗日斗争が執拗に反復された。

林小貓、鄭青、林玉衡、柯鉄虎、黄選、簡施玉、簡義、陳法、胡嘉猶、陳秋菊、簡大獅、蔡清琳、劉乾、黄朝、羅福星、李阿斉、陳阿栄、張火炉、羅嗅頭、林老才等々を中心代表とする事件が頻発し、大正四年には余清芳を首謀者とするかの西来庵事件が発覚し翌年鎮定され検挙者一九五七名、死刑を宣告された者八六六名という陰惨な結果をみた。辛亥革命に触発され、神託を利用して斎堂の組織によって斎友を煽動した革命運動は挫折したが、宗教界に与えた影響は甚大であり、この事件を契機として斎教徒の多くは日本の曹洞宗、臨済宗に保護を求めた。

当時、曹洞宗が中心となり成立させた愛国仏教会台南仏心社宗教聯合約束章程の六条に「籍神仏名号誘騙愚民財物…」七条に「蔑視官長誹謗時政炫異矜奇　捏造邪説

惑世誣民…」とあって斎教徒の行動を監視し為政者に対する反抗を抑圧することを示している。

日蓮宗の台湾開教については、明治二九年六月、渡辺日雄師が台湾駐在布教師に任命され三五年満期された。三〇年身延七七世物部日厳大僧正から台湾島第一布教所へ本尊を授与され星降り妙純寺三六世権僧正日毅師（脇田堯惇）から祖像が贈られている。法華寺の総代、池上政吉氏の談話によれば「法華寺は佐野是秀師によって開かれ、佐野師は渡辺英明師と一緒に二九年六月渡台され最初のうちは新竹で布教されていたが、後台北に来られれ、その頃台北で布教されていた赤井日蘇師のあとを受けて若竹町に庫裡を新築、明治四二年頃でした。法華寺を公称したのは大正六年四月、九月に本堂が…」（西川満　生死の海）法華寺は開山は佐野是秀（精研院日理）二代は岡田栄源（慈照院日惺）三代は沖原龍進（唱導院日海）で終結し、庫裡は爆撃によって姿を変えたが、山門、宝塔、本堂、位牌堂に面影をのこしている。

基隆・蓮光寺、台南・妙経寺、台中・安国寺、宜蘭、新竹、嘉義、高雄、花蓮港に所在した布教所は現存しない。

日本が中国大陸に武力進出を開始した昭和一二年七月以限、台湾人の内応、反乱を危惧して皇民化が主張せられ、旧慣の寺廟を廃止統合し、神明会、祖公会を解散、各街庄に神社の摂社末社を建立し台湾人の家庭の正庁に伊勢神宮の大麻を奉祀することが強制され、日本語家庭の検定にあたり、配給物の差別により誘引するなど、生活の万般にわたって皇民化運動が促進強化せられた。昭和一三年、台湾神社に隣接して国民精神研修所が竣工し、僧侶までが、神職宮司の指導によってミソギを実修させられるという暴挙があった。

昭和二〇年八月、日本の敗北によって、植民地的制約が排除せられるに及び、旧来の諸宗教は漸次回復し、寺廟の重修、新建は雨後の春筍の如く興起した。民国五二年松山・慈祐宮、五三年彰化、南瑤宮、五六年樹林・済安宮、中壢、仁海宮…五七年台南県・南鯤鯓代天府、台南市安南区土城の台南正統鹿耳門聖母廟では六四年頃から約六億元の工費を以て建築中である。以上は単なる数例にすぎない。民国五七年民国政府内政部は「改善民間祭典節約辨法」を頒布し寺廟の商業化、祭典費の浪費を糾正し、六八年六月十四日の行政院会に於て「寺廟教堂条令」が通過し、立法院に於て転請された。

台湾の九大教派は、道教、仏教、回教、理教、天理教、

軒轅教、大同教、天主教、基督教、…政府に禁止された邪教としては、白蓮教、摩門教、一貫道、真空教、存在教、救世教、夏教、天宮教、望教、生長之家、創価学会、鴨蛋教、大被教、など百余種の多きに及び台湾人の信仰に対する熱烈さを推知し得る。近年、新港飴で有名な雲林県新港郡で裸女教が出現し、風俗に害ありとして取締をうけた。

台湾に於ける宗教は奸余曲折の歴史を、色濃く反映していることに注目すべきである。

政権と密着していたオランダ伝来の基督教会は潰滅し政権と無縁のイスパニア伝来の天主教、英国の長老教会は今以て健在である。日本時期、土匪の一味として処刑された無名の戦士も、光復後に於ては抗日義勇軍の志士として崇敬の対象となる。光復後の、台湾の仏教について若干の特色を略記すれば、戒律を重視しない日本仏教の影響から脱却するため伝戒を重視したこと、寺廟に本末の関係がなく僧尼に階級の上下がなく平等であることを自負していること、日本と同様に年少者の出家が減少していること、反対に住持の八割を尼僧が占めていることは今後の問題であろう。高雄仏光山にある東方仏教学院は出家者の教養の向上に開設されたものであるが、再三再四の猛運動にも拘らず、未だ政府公認の大学となっていない。

台湾仏教の前途はまさに多事多難である。

（一九七九・十一・稿）

ヨーロッパ修道院訪問と霊性の交流

町田是正

洋の東西を問わず真の文化の源泉は「霊性」(die Göttlichkeit, Geist)である。鈴木大拙博士の創唱をまつ（「日本的霊性」（岩波文庫所収）参照されたい）までもなく、人間生活のすべての営みの源泉であることは誰人も否定できない事実である。人間の知情意の根本機能としての霊性こそ、人類文化の源泉であるべきである。我々は改めて現段階に於て、霊性の重要性を問い直す秋に至っている。

これまで東西文化の交流は盛んであった。我国とヨーロッパ諸国との間にも、人文・社会・自然科学の諸分野・芸術や経済の交流は稔り多いものがあった。然るに霊